

## 長編小説の中の短編小説—— “One Trip Across”と“The Tradesman’s Return”の場合

前 川 利 広\*

(平成18年9月29日受付；平成18年11月9日受理)

### 要 旨

アーネスト・ヘミングウェイの“One Trip Across”と“The Tradesman’s Return”はどちらも雑誌に掲載されるために書かれた短編小説である。しかしその後ヘミングウェイは続編を書き、これら二つの短編小説と合併することで新たな長編小説を構成した。その結果出版されたのが、*To Have and Have Not*である。それはPart One, Part Two, Part Threeの3部から構成されており，“One Trip Across”がPart Oneとして、また“The Tradesman’s Return”がPart Twoとして前半を飾った。そしてPart Threeにおいて主人公の悲劇的最期が描かれ、ハリー・モーガンの物語は完結する。

しかし無理な構成がたり、*To Have and Have Not*出版後の批評は概ね芳しくなかった。批評家達はさまざまな問題点を指摘したが、それらは小説作法の観点からすれば読者の共感を得る上で大事な技術ばかりであった。それ故にかえって、それらはヘミングウェイの意図する小説作法を知る上で示唆するものが少なくない。ここではそれらを整理し、ヘミングウェイの創作の技術を考察した。

### KEY WORDS

Short Story	短編小説	Novel	長編小説
Symbol	象徴	Hardboiled	ハードボイルド

Ernest Hemingway の“One Trip Across”は *Cosmopolitan* 誌 1934 年 4 月号に掲載され、のちに長編小説 *To Have and Have Not* の第一章である Part One になった。これはヘミングウェイのそれ以前の短編小説と比較するとかなり長い短編小説であり、Baker は“a long short story”と呼んだ (*Artist* 203)。ヘミングウェイの二番目の妻 Pauline の姉妹 Jinny Pfeiffer は“One Trip Across”を読んでその迫真性に強い印象を受け、それが創作であると言うヘミングウェイの言葉をにわかには信じられなかったという (Baker, *Life* 246)。また *Cosmopolitan* 誌の Harry Payne Burton は原稿を読んでその出来を賞賛し、5500 ドルで買うという電報を送った。この金額は、ヘミングウェイのこれまでの短編小説に対する原稿料のうち最も高額なものであった (Baker, *Life* 252)。

“The Tradesman’s Return”は“One Trip Across”の主人公 Harry Morgan を再度登場させた短編小説であり、1935 年 12 月 9 日に *Esquire* の Arnold Gingrich 宛に送られ、その翌年、同誌 2 月号に掲載された (Reynolds, *Chronology* 82-3)。<sup>1</sup> “The Tradesman’s Return”は *To Have and Have Not* の第二章となる Part Two として、“One Trip Across”の後に続いた。

---

\* 言語系教育講座

*To Have and Have Not* が1937年に出版された直後の批評は、肯定的なものや否定的なものが入り混じってさまざまであった。*Time* 誌はハリー・モーガンを“most thoroughly consistent, deeply understandable character”とし、小説家としてのヘミングウェイについては“... this novel affirmed his place in the front rank of American writers”と評価した(Reynolds, '30s 280)。またそれとは逆に、プロレタリアートに好意的な場面描写に我慢できないとする批評や、ハリー・モーガンの卑猥な語を含む言葉遣いに憤る批評、断片的描写を合成したかのように読める構成にとまどいを覚えると述べた批評などもあり、実にさまざまなものが掲載された(Reynolds, '30s 280)。

左翼系雑誌 *New Masses* は、小説中に描かれている“have nots”とハリー・モーガンの関わりを、ヘミングウェイの“increasing awareness of the economic system and the social order it dominates”(Reynolds, '30s 281)として読み、賞賛した。“have nots”を主人公として大恐慌の最中に書かれたこの小説は、著者が左傾したかと思わせないでもない。それがはたして射っていたか否かは重要な問題の一つであるが、そのことについて詳しく論じるのは「ヘミングウェイと政治」というテーマに逸脱してしまうことになる。ここでは *To Have and Have Not* に対して与えられたさまざまな評価と、当初短編小説として雑誌に掲載された“One Trip Across”及び“The Tradesman’s Return”が、のちに *To Have and Have Not* の第一章と第二章として長編小説を構成することになったことにまつわる技術的問題に限定して論じたい。「ヘミングウェイと政治」というテーマについてはひとまず Carlos Baker の見方をここに引用することで、仮に抑えておきたい。

“The Tradesman’s Return” had nothing in common with the general run of proletarian fiction in the period of the Great Depression. Yet his leftist sympathizers could at least take comfort from the slender fissure, the thinnest of thin red lines, which had now appeared in the wall of Hemingway’s resistance to persuasion. (*Life* 282)

世界中が大恐慌に見舞われていた当時、それ以前はまったくといっていいほど政治的、経済的問題から距離を置いた作品を書いてきたヘミングウェイが労働者階級に好意的なストーリーを書いたことで、ヘミングウェイの内部に大きな変化を見たと思ったものも少なくなかった。だがヘミングウェイ自身に明白な方向転換が見られたと結論するには、まだ尚早と言うべきであった。周囲が共産主義の大波にさらわれていた時代にあっても、それまで強固に存在していたヘミングウェイの個人主義は、そうたやすく消え去るものではなかっただろう。

当時、ヘミングウェイが自身の政治的思想の拠り所をどこにおいていたかという問題はともかくとして、次のような批評が出たことは興味深い。

*The Nation* perceptively saw the novel as “a transition to the kind of book that Hemingway will write in the future.” Malcolm Cowley, who blew hot and cold over Ernest’s work, now believed him “just beginning a new career.” (Reynolds, '30s 281)

“One Trip Across”と“The Tradesman’s Return”, そして *To Have and Have Not* の Part

Three はハリー・モーガンを主人公とし、いくつかの出来事を時間的順序で描いている。これらは合成されることによって長編小説となっているが、ヘミングウェイがこれまで書いてきた小説と較べると、政治的色彩が異様に濃い。しかしそれだけでなく、小説の技術という観点から言っても非常に大きく異なっている。特に Part One と Part Two は、ヘミングウェイによる他のどの短編小説、長編小説とも違う書き方がなされている。描写の仕方だけでなく、創作の技術そのものがまったくといっていいほどにかけ離れている。

*To Have and Have Not* 出版直後の批評では、さまざまな評価が見られた。それに対して、その後年月が経過して本格的な文学批評が論文として発表されると、かなり多くの批評家が作品の出来に否定的見方を提出するようになった。Scott Donaldson はこの小説を論じるにあたって、まず次のような概観から始めている。“Most critical reaction to *To Have and Have Not*, which was published in October 1937, found the novel aesthetically disappointing” (106). あるいは、なにかしら美点を見出して肯定するにしても、同時に数々の欠点を挙げないわけにはいられなかった。要するに、手放して作品の出来を賞賛できるということにはなかった。例えばベーカーは次のように言っている。

Like his play, *The Fifth Column*, . . . *To Have and Have Not* shows marked deficiencies as a work of art. Unlike *The Fifth Column*, however, the novel contains some of Hemingway's best writing along with much that simply does not cohere. . . . the reader is in a position to appreciate the worth of the good parts of the novel, and to understand why, considered as an artistic unit, *To Have and Have Not* is Hemingway's least satisfactory book. (*Artist* 205)

では実際にどのような創作技法上の問題点、もしくは欠陥点があるのか、ここに列挙して考察することにする。

1) 一読するとまず、これまでのヘミングウェイの短編小説に見られた描写の方法と構成、そして視点の技術が、Part One と Part Two ではあまり使われていない。*In Our Time* や *Men Without Women* に収められている短編小説は、その殆どがヘミングウェイ以前の作家が用いたリアリズムの常套手段を使わぬよう苦心して書かれているところに、新鮮さを感じさせた。比喩という小説作法上伝統的な技術でさえ、ヘミングウェイは彼なりの新しさを加味し駆使したのに対して、“One Trip Across” と “The Tradesman's Return” ではリアリズム的描写による、ストレートな表現が使われている。例えばヘミングウェイは象徴を巧妙に使った作家だが、ここでは滅多に使っていない。ハリーが Mr. Sing から嘔みつかれたことがそのごく稀な例であるが、Wirt Williams は次のように言っている。“... [Harry's] life has been changed and he has been changed by the incident. It has infected him in a sense, and the infection is metaphorically suggested by the bite Mr. sing has given him” (111).

またこれまでの短編小説には時々見られたように、景色を描写してテーマと密接に関わるメタファーとするという技術も目につかない。例えば “The End of Something” の冒頭はその典型であったが、“One Trip Across” と “The Tradesman's Return” にはそれに似た緊密なテクニクが見当たらない。これらの特徴をまとめれば、“... the careful compacting of

pictures into emotional and thematic units, the deliberate composition of imagistic landscapes, the construction of a network of images running through the entire work that accents and focuses its themes . . . are not in evidence” (Williams 119) と言えるであろう。

2) この小説では語り手の視点が実にさまざまに移動する。“One Trip Across”での視点はハリー・モーガンであり一人称で語られているが，“The Tradesman’s Return”では三人称に変化している。このとき視点はハリーのそばに位置しつつも途中で Captain Willie の船上に移動し、今度はそこから停泊している船の上のハリーの声を聞くことになる。ベイカーはこの視点の移動を悪い技法とは見ておらず、むしろ効果的であるとしている。“This double view of Morgan’s predicament gives the story a length of perspective which it would lack if, like the first one, it were told entirely in the first person or entirely from the silent-partner position aboard Harry’s boat” (*Artist* 218-19).

また Part Three は Albert の一人称で始まり、途中ハリーのモノローグが挿入され、そして三人称の語り手へと移動する。ベイカーはこれにも効果を認めているが (*Artist* 219)、このように頻繁な視点の移動は読者の感情移入を阻害して共感を弱めると考える評者が多い。例えばこの点に関して Stephen Cooper は、ベイカーと相容れない考えを示している。“Hemingway changes the narrative point of view in the novel several times, not always for a clear reason, and these changes also damage the novel’s unity” (65-6).

3) 物語の構成に統一性が見られない。例えば Part Three ではヨットを所有している裕福な階級の人物が少なからず登場するが、彼らは物語にうまく溶け込まず、その存在自体が浮き上がったままに終わっている。Gerry Brenner は構成上の欠陥について次のように述べている。“The novel deserves to be faulted for its structural flaws, perhaps caused by its interrupted gestation” (109).

その原因は、Part One がそもそも短編小説として構想されたということ、そしてその時点では長編小説にするつもりではなかったこと、Part Two も同じように短編小説として執筆されたことが発端となっている。その後 Part One と Part Two に続く Part Three を書いて合わせ、一つの長編にするという構想が生まれて執筆に入った。その時に十分な時間をかけて統一を図って書き直せば、あきらかに完成度はもう少し高かったに違いない。しかし折からスペイン内戦が勃発し、Part Three を書いているときでも心はスペインに飛んでいた (*Baker, Artist* 204)。これまでもヘミングウェイと戦争の関係には浅からぬ因縁があり、またスペインはヘミングウェイが格別に愛着を持っている国であったから、執筆の最中、気もそぞろであった。その影響が直接表れてしまったのが、左翼作家 Richard Gordon の描写と、すでに軽く触れたが裕福な人物群 (“haves”) の描写である。前者はそもそもハリーとの比較の対象となる人物として引き合いに出された人物であるが、それがフレディーのバーにたむろす退役軍人の描写ほどには成功しなかった (*Cooper* 65)。

4) ハリーを初めとする “have nots” は、しばしば経済的困窮を克服するための手段あるいは鬱憤ばらしとして、暴力に訴える。特にハリーの場合それが殺人にまで至るのだが、彼がいかに生活苦にあえごうとも、冷徹に殺人行為をしておおせる様はやはり通常の読者にはなじめない。そのことも読者による主人公への共感を阻害してしまう原因になっている。結局ハリーの行為そのものが最終的にはハリー自身の死を招くことになるが、読者はハリーの勇気に敬意を表するものの、同情したり共感したりするまでには至らない。“[Harry] turns to crime a little

too quickly to make his claims of economic necessity completely convincing” (Cooper 77).

そしておそらくほとんどの読者にとってもう一つ気になることは、殺人を犯したあとのハリーの道徳的意識である。彼は家族を路頭に迷わせることはできないという責任感を強く抱いており、そのためには犯罪に関与することに迷いが見られない。Mr. Sing を殺すときも苦渋の決断の末という気配は更々なくなんら躊躇しないが、ここに道徳的意識は存在していないようである。このことも読者が感情移入する上で、大きな妨げになっている。ハリーの勇気は認めるにしても、生活苦からの脱却のため一気に殺人に走る単純さは、通常の神経では理解できないであろう。<sup>2</sup>

5) 内面の描写が不十分な登場人物が少なくないこともまた、非常に大きな技術的欠点である。労働者階級の者たちには同情の目が注がれて描写されているのに対して、裕福な層の人物描写はどれもこれも欠陥だけが強調され、皮肉った見方がなされている。つまり登場人物として奥行きがなく、ここにも読者は納得がゆかないものを感じるのである。クーパーは次のように述べている。

Whereas Harry is a fully realized character, the rich people in the novel all seem one dimensional, particularly the people in the yachts. These people primarily are presented as types rather than individual human beings, unlike almost all the working-class characters in the novel, who seem to be individuals. . . . Placing the rich characters in the novel to act as a foil to Harry and to be the subjects of some social commentary, Hemingway shows no interest in them as individuals with lives of their own. (69-70)

このことは登場人物の一人、Richard Gordon についても同様である。彼は流行作家という設定であるが、労働者階級の間から侮辱的な評価を受け、プライドを失っている様子が皮肉たっぷりに描かれている。ゴードンの生き方はハリーのコントラストとして描かれており、左翼思想に同情的な小説を書きつつ実生活では金持ちの女性につきまとい、自らの夫婦仲を危うくする。それは Marie との充実した夫婦の絆を維持しているハリーの引き立て役としての役割であるが、そのことがあまりにもあからさまであるため、かえって白々しく思えるほどである。

Part Two で登場する政府の高官 Frederick Harrison についても同様の描写がなされている。ハリソンがたまたま釣りのために Captain Willie の船に乗っているとき、銃撃戦で負傷してしまったハリー・モーガンが海に密輸品である酒を投棄している場に遭遇する。するとハリソンは釣りよりももっと面白いものがあるというわけで、ハリーを捕まえることに関心が移ってしまう。

[Harrison] has no sympathy for common people like Captain Willie . . . or Harry, whom he sees only as a bootlegger and a law-breaker. Obsessed with his own power and importance, Harrison finds pursuing and capturing Harry more fun than fishing and a way of earning personal glory by single-handedly capturing a criminal. . . . Although what Harrison does is technically and legally correct, it serves no real social

or moral purpose. (Cooper 73)

結局ヘミングウェイは主人公およびその家族と同類の人間には視線が温かく、そうでない社会階層の人間はみな嘲笑の対象にしてしまっている。社会と人間のありようをあまりにも単純な基準で判定してしまっているのである。スコット・ドナルドソンは Sinclair Lewis の評に同意しつつ、次のように述べている。

... *To Have and Have Not* seems to demonstrate “that all excellently educated men and women are boresome and cowardly degenerates, while un-lettered men engaged in rum running and the importation of Chinese coolies are wise and good and attractive.” (108)

すなわちこれは、当時の社会的状況を背景にして “haves” と “have nots” を見るヘミングウェイの見方がさほど熟していなかったことを意味しているか、あるいはヘミングウェイの個性の中に人間を二分して見るという見方が自分のものでなく、生かじりの思想であったかのどちらかである。

6) 読者によるハリーへの感情移入が今ひとつ徹底できない理由は、ハリー・モーガンとその家族の結びつきの描写が断片的にしか描かれていないということにもある。家族を扶養するという意味におけるハリーの意識が極めて高いことと、ハリーとその家族の紐帯の強固な様は 12 章, 14 章, 25 章, 26 章に描写されている。12 章と 14 章は家庭での夫婦のやりとりを描き、Marie との心のつながりを明らかにしたものである。25 章は瀕死の重傷を負ったハリーが船から陸に揚げられる場面と、病院で死んだハリーにマリーが最後に対面する場面である。26 章ではマリーが生前のハリーの男らしさを称え、またかつての夫の姿を思い返している描写である。しかしどの章にもハリーが立派で男らしかったというマリーからの賞賛があってもそれは言葉による説明でしかなく、描写によって人物の内面を伝えるという深みがさほど感じられない。ハリーの人となりや奥行きをもって伝えられているというわけではないのである。おそらくマリーからの褒め言葉によって、読者がハリーとマリーの相互の信頼を想像して埋めてくれることをヘミングウェイは計算したのかもしれない。それはアンダーステイトメントの技術ではあるのだろうが、効果は低いと言わざるをえない。その数年後に書かれることになる *For Whom the Bell Tolls* にあるような、じっくりとして十分な描写とはほど遠いものである。

“One Trip Across” と “The Tradesman’s Return” 以前に書かれた主な短編集の出版年を見てみると、*In Our Time* が 1925 年 (10 月)、*Men Without Women* が 1927 年 (10 月)、*Winner Take Nothing* が 1933 年 10 月であった。これらヘミングウェイの代表的短編集の執筆は、時間的に “One Trip Across” とほとんど間を置かず連続していることがわかるが、それにもかかわらず “One Trip Across” の場合、それ以前の短編集と創作技術が大きく異なる。このことについてもすでに軽く触れたが、*In Our Time*, *Men Without Women*, *Winner Take Nothing* の三つの短編集では象徴・比喩等のレトリックが駆使され、不注意な読み方ではなにがストーリーのテーマなのかが一読して理解できるようには書かれていない。それと比較して “One Trip Across” およびその続編 “The Tradesman’s Return” の場合、レトリックや隠れた意味などという作意がまったくなく、テーマが容易に指摘できる。つまり

素直に読んで行けば出来事の発生が理解でき、主人公の考えが読者に伝わり、結末に至るのである。

またストーリーの展開自体にも大きな違いが見られる。ヘミングウェイはかつて自身の創作法の一部を鬪牛の解説書のなかで明らかにしているが、次の点はストーリーの展開そのものに関わる大事なことである。

Old Lady: And is that all of the story? Is there not to be what we called in my youth a wow at the end?

Ah, Madame, it is years since I added the wow to the end of a story. Are you sure you are unhappy if the wow is omitted?

Old Lady: Frankly, sir, I prefer the wow. (*Death* 182)

“One Trip Across” および “The Tradesman’s Return” を執筆する以前の短編小説には、ここで老婦人が言うところの “the wow” がなく、“One Trip Across” および “The Tradesman’s Return” にはそれが明白にあるのである。

ヘミングウェイがこのように旧来の物語作法に戻ったということは、読者としての “have nots” も意図したということであるかもしれない。そう考えれば、すでに6点挙げた創作法の欠点はそのほとんどが物語をより易しく、理解しやすいものにするうえで大きく役立っていることに気づく。それは推測の域を超えてはいないものの、そう考えれば創作法の大転換がなされた理由がわかる気がするのである。これはモダニズム作家であるヘミングウェイが、19世紀的小説作法に戻ったということを意味するであろう。その意味では、*To Have and Have Not* は非常に興味深い作品であったということができる。

## 註

1. ベイカーは12月10日に送ったと書いている。(Life 281)
2. ハリー・モーガンが人を殺す動機と、ロベルトのような革命家たちが人を殺す動機とは、かなり大きな隔たりがある。“Harry cannot respect a movement that tolerates a brutal man like Roberto and excuses the murder of innocent people, no matter what the cause. Of course, Harry is capable of killing, too. The difference seems to be that Harry kills for specific and personal reasons in specific situations . . . but the revolutionaries kill for an abstract cause and often do not question their justification for killing” (Cooper 76).

## 引用文献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scribner's, 1969.
- . *Hemingway: The Writer as Artist*. Rev. ed. Princeton: Princeton UP, 1952.
- Brenner, Gerry. *Concealments in Hemingway's Works*. Columbus: Ohio State UP, 1983.
- Cooper Stephen. *The Politics of Ernest Hemingway*. Ann Arbor: UMI Research P, 1985.
- Donaldson, Scott. *By Force of Will*. New York: Viking, 1977.

- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. New York: Scribner's, 1987.
- . *Death in the Afternoon*. New York: Scribner's, 1932.
- . *To Have and Have Not*. New York: Scribner's, 1937.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: An Annotated Chronology*. Detroit: Omnigraphics, 1991.
- . *Hemingway: The 1930s*. New York: Norton, 1997.
- Williams, Wirt. *The Tragic Art of Ernest Hemingway*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1981.



## Two Short Stories in a Novel: “One Trip Across” and “The Tradesman’s Return”

Toshihiro MAEKAWA \*

### ABSTRACT

“One Trip Across” and “The Tradesman’s Return” are rather long, two short stories by Ernest Hemingway, originally written for monthly magazines, *Cosmopolitan* and *Esquire*, respectively. They were later incorporated into the novel *To Have and Have Not*, with the former story as “Part One” of the novel and the latter as “Part Two.”

Soon after its publication the critics of the novel gave it a mixed reception, pointing out many faults in terms of techniques of writing fiction. Especially important is its lack of unity as a novel, and this seems to have been caused by the fact that Hemingway hastily combined the two stories with the latter half of the novel which was newly written as their sequel. In this article, these two stories, as well as the novel as a whole, are discussed, and we will find out how the failure has been brought about and what should have been done by the author.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages